回鶻文字考

第一章　字體

回鶻文字は Radloff 氏が一九一一年に發刊したる Alttürkische Studien IV に載せたる次の表に見ゆるが如く、母音字三、子音字十四、合して十七字より成り、母音十と子音二十とを表はすものなり、子音字の數を十四と數ふることは、既に Ahmed ben Arabschah の著はせる帖木兒の歷史 Ajaeb-ul-Magdur にも見え、又三の母音字と十四の子音字とを數ふることは、蒙古の史籍「Ssadscha Bandida[1] の作りたる蒙古字に就きて」の中にも記さる。

次表中に見ゆる文字の外、4字の上に一箇若しくは二箇の點を附したる 13 の上に一箇の點を附せる 11 字の下に一箇若しくは二箇の點を附せる等の文字も存すれど、此等の點は勿論比較的後世に於て聲音を區別する爲に用ゐたる點にして、に對しては Radloff 氏は k、χ字を用ゐ、Müller 氏は q χ字を用ゐ、に對しては Radloff 氏は露西亞字の ж、Müller 氏は z. z̤を用ゐて之を寫せり。は が語の中間に位する a と字形の區別し難きより、此の符點によりて n 字なるを示せるに過ぎず。(s)と(š)とは極めて正しく書き別たれたるものゝ外は字形の上より區別を立つること殆ど困難なれども、相異りたる字母として存するものなることは疑なし、此の字も亦時には と記して s̈ を表はし、點なきものを以て s を表はすこともあれど、此の如きは極めて

東洋文庫
財團法人東洋文庫
昭和廿四年一月十日
1261325